

『雪国』 高慧勤訳

「から」の「で」を用いる日本語原文とその中国語対訳

注:分類欄に記載されている記号は次の意味を表す。
A=「原因・理由を表すもの」、B=「接続機能を持つもの」、C=「無標」

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
5	「ほんの子供です*から*、 駅長さんからよく教えてやっ ていただいて、よろしくお願 いいたしますわ。」		370	“他还完全是个孩子，请您多加 指点，拜托您了。”		C	C
8		しかしそれは彼が心を遠くへ やっていた*から*のことで、 気がついてみればなんでも ない、向側の座席の女が写っ たのだった。	372		◆因为◆他魂牵梦萦正想着远 方。等他定神一看，不是别的， 原来是对面座位上那位姑娘映 在玻璃上的影子。	A	A-1
8		娘の手を固くつかんだ男の青 黄色い手が見えたもの*から*、 島村は二度とそっちを 向いては悪いような気がして いたのだった。	372		蓦地瞥见那男人一只青黄的手， 紧紧攥着姑娘的手，岛村◆便 ◆觉得不再去看。	B	B-2
8		三等車である。島村の真横で はなく、一つ前の向側の座席 だった*から*、横寝してい る男の顔は耳のあたりまでし か鏡に写らなかった。	372		寢真眉吉横寝。他和戏院不是并 排，遇真厅厅中一排的另另一侧。 男人侧卧着，完横脸脸照到他 耳朵那里。	C	C
8		娘は島村とちょうど斜めに向 い合っていることになる*の で*、じかにだっで見られる のだが、…	372		姑娘恰好坐在岛村的斜对面，本 来劈面便瞧得见。	C	C
9		遙かの山の空はまだ夕焼の名 残の色がほのかだった*から*、 窓ガラス越しに見る風景 は遠くの方までもの形が消 えてはいなかった。	373		远山的天空还残留一抹淡淡的 晚霞。隔窗眺望，远处的风物依 旧轮廓分明。	C	C
10		窓の鏡に写る娘の輪郭のまわ りを絶えず夕景色が動いてい る*ので*、娘の顔も透明の ように感じられた。	373		映出她身姿的那方镜面，虽然挡 住了窗外的景物，可是在她轮廓 四周，接连不断地闪过黄昏的景 色。◆所以◆姑娘的面影好似透 明一般。	A	A-36
10		島村が葉子を長い間盗見しな がら彼女に悪いということ を忘れていたのは、夕景色の鏡 の非現実な力にとらえられて いた*から*だったろう。	374		岛村暗中盯着叶子看了好一会 儿，忘了自己的失礼，想必是镜 中的暮景有股超乎现实的力量， 把他给吸引住了。	C	C
11		ところがそれから半時間ばかり 後に、思いがけなく葉子達 も島村と同じ駅に下りた*の で*、彼はまたなにか起るか と自分にかかわりがあるか のように振り返ったが、…	374		然而，事隔半小时之后，出乎意 料的是，叶子他们竟和岛村在同 一个站下车，他觉得好像要窟伏 焚担跟自己有关系的並似的， 回过头去看了一眼。	C	C
12		…雪国の冬は初めてだ*から*、 土地の人のいでたちに先 ずおびやかされた。	375		但他这是初次领略雪国之冬，◆ 所以◆，一见到当地人的这副打 扮，先自给唬住了。	A	A-36
14		あんなことがあったのに、手 紙も出さず、会いにも来ず、 踊の型の本を送るという約束 も果たさず、女からすれば 笑って忘れられたとしか思え ないだろう*から*、先ず島 村の方から詫びかいいわけを 言わねばならない順序だっ たが、…	376		既然有过那一段交清，竟然信也 不写，人也不来，连本舞蹈书都 没有如约寄来。在她看来，恐怕 只能置之一笑，心里明白，自己 是被人遗忘了。按说，理应先由 岛村陪不是或是辩白一番才是。	C	C
14		女も濃い白粉の顔で微笑もう とすると、反って泣き面 になった*ので*、なにも言わ ずに二人は部屋の方へ歩き出 した。	376		她脸上搽了很厚一层白粉，想要 向他微笑，反而弄成一副凶相。 结果两人谁都没说什么，只是向 房间恹恹。	C	C
14		彼女は彼を責めるどころか、 体いっばいになつかしさを感 じていることが知れる*ので*、 彼は尚更、どんなことを 言ったとしても、その言葉は 自分の不真面目だという響 きしか持たぬだろうと思っ て…	377		岛村仍然感觉到，他非但没有责 怪自己的意思，反而整个身心都 对他感到依恋。岛村觉得不论自 己说什么，只会显得自己虚情假 意。	C	C
15		その日は道路道路普請の落成 祝いで、村の藪倉兼芝居小屋 を宴会場に使ったほどの賑か さだ*から*、十二三人の芸 者では手が足りなくて、とう てい貰えないだろうが、…	377		而那天真赶上修路工程落成典 礼，村里十分热闹，连兼作戏园 的草房都当了宴会的场所。◆所 以◆，女佣约略地说了一下，十 二三个艺妓本来就忙不过来，今 天恐怕叫不来。	A	A-36
15		無為徒食の島村は自然と自身 に対する真面目さも失いがち な*ので*、それと呼び戻す には山がいいと、よく一人で 山歩きをするが、…	377		终日无所事事的岛村，不知不觉 对自己也变得玩世不恭起来。为 了唤回那失去的真诚，他想最好 是爬山。◆所以◆，便常常独自 自个儿往山上跑。	A	A-36
16		…半玉がなく、立って踊りた がらない年増が多いから、娘 は重宝がられている、…	378		此地没有雏妓，多些些不愿起来 跳舞的半老徐娘，◆所以◆年轻 姑娘就给当成了宝贝。	A	A-36
16		師匠の家の娘なら宴会を手伝 いに行ったにしろ、踊を二つ 三つ見せただけで帰る*から*、 もしかしたら来てくれる かも知れないとのことだっ た。	378		师傅家的姑娘，虽然去宴会上帮 忙，顶多跳上两三个舞就会回来 的，说不定她倒能来。	C	C
17		それにしても彼は頭から相手 を素人ときめているし、一週 間ばかり人間とろくに口をき いたこともない後だ*から*、 人なつかしさが暖かく溢 れて、女に先ず友情のような ものを感じた。	378		尽管如此，岛村一上来就当她是 好人家的女儿看。再说他在山里 有一个星期没怎么和人交谈，正 是一腔热忱，对人充满眷恋之 情。所以，对这姑娘，首先便有 种近乎友情的好感。	C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
18	「それを君に聞いてるんじゃないか。初めの土地だから*、誰がきれいかわからないさ。」		380	“我不是在问你吗？我人地两生，怎么知道谁漂亮？”		C	C
19	「君とさっぱりつきあいたい*から*、君を口説かないんじゃないか」		380	“我是想跟你清清白白做个朋友、◆所以◆才不来怎么你。”		A	A-36
20		島村は東京の下町育ちな*ので*、子供の時から歌舞伎芝居になじんでいたが、…	381		島村生长在东京的商业区，从小◆便◆接触歌舞伎戏剧。	B	B-2
20		女の声にあまり実感が溢れている*ので*、島村は苦もなく女を騙したかと、かえってうしろめたいほどだった。	381		她的声音里透着真情实意，不免◆使◆島村有些内疚，觉得自己不是轻率地骗了她。	B	B-5
20		そうすれば女はさいわい素人だ*から*、細君にもいい遊び相手になってもらえて、退屈まぎれに踊の一つも習えるだろう。本気にそう考えていた。	381		幸而这女郎不是风尘中人，可以请她给太太做伴，无聊时还可以跟她学段舞蹈解解闷。他确是这么真心打算来着。	C	C
20		それに彼は夏の避暑地を選び迷っている時だった*ので*、この温泉村へ家族づれで来ようかと思った。	381		再说，他那时对夏天去哪儿去避暑，尚委决不下。正考虑要不要把家眷也带到这温泉村来。	C	C
21		時々西洋舞踊の紹介など書く*ので*文筆家の端くれに数えられ、…	382		◆由于◆他不时写些介绍西方舞蹈的文字，好歹也忝列文人之属。	A	A-15
23		師匠の家の娘だ*から*ではあろうが、鑑札のない娘がたまに宴会などの手伝いに出て、咎め立てる芸者はないのだろう。	383		大概◆因为◆是师傅家的姑娘吧，即或没有执照偶尔去宴会上帮着应酬，也不会有哪个艺说闲话。	A	A-1
24		それでももう一時間くらいは経ただろう*から*、なんと芸者を帰す工夫はないかと考えるうちに、…	384		约莫过了一小时的光景。岛村寻思如何打发艺妓回去，	C	C
24		肌の底黒い腕がまだ骨張っていて、どこか初々しく人がよさそうだから*、つとめて興座めた顔をすまじと芸者の方を向いていたが、…	384		黑黑的手臂，瘦骨嶙峋的，不过人好象未经世故，显得很老实。岛村脸上尽力不露出扫兴的神色，一直朝艺妓那边看，	C	C
24		島村がむっつりしている*ので*、女は気をきかせたつもりらしく黙って立ち上って行ってしまうと、一層座が白けて、…	384		姑娘见岛村闷声不响，似很感兴趣，默默地起身走开了。这一来，场面更加尴尬。	C	C
24		電報が替の来ていたことを思い出した*ので*郵便局の時間にかこつけて、芸者といっしょに部屋を出た。	384		忽然想起收到一笔电汇，借口要赶时间上邮局，便同艺妓走出房间。	C	C
25		その杉は岩にうしろ手を突いて胸まで反らないと目の届かぬ高さ、しかも実に一直線に幹が立ち並び、暗い葉が空をふさいでいる*ので*、しいんと静けさが鳴っていた。	385		杉树长得很高，非要把手放在背后，撑在石头上，仰起上半身才能看到树梢。一株株的杉树，排成一行行的，树叶阴森，遮蔽天空，周围渺无声音。	C	C
26	「…お煙草忘れていらしたらしい*から*、持って来てあげたんですね。」		385	“…见你忘了带烟，顺便给你捎了来。”		C	C
26		七日間の山の健康を簡単に洗濯しようと思いついたのも、実は初めにこの清潔な女を見た*から*だったろうかと、島村は今になって気がついた。	385		这时他才发现，在山上待了七天，养精蓄锐，◆之所以◆想把过剩的精力一下子消耗掉，实在◆是因为◆他先就遇见了这个洁净的姑娘。	A	A-44
26	「僕は思いちがいでいたんだな。山から下りて来て君を初めて見たもんだ*から*、この芸者はきれいなんだろうと、うっかり考えてたらしい。」		385	“是我弄错了。从山上下来，头一个见到的就是你，糊里糊涂，以为这儿的艺妓全很漂亮。”		C	C
27		細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇まことに美しい蛙の輪のように伸び縮みがなめらかで、黙っている時も動いているかのような感じだ*から*、もし皺があつたり色が悪かつたりすると、不潔に見えるはずだが、そうではなく濡れ光っていた。	385		笔挺的小鼻子虽然单薄一些，但下面纤巧而紧致的双唇，如同水蛙美丽的轮环，伸缩自如，柔滑细腻。沉默时，仿佛依然在翕动。按理起了皱纹或颜色变难看时，本该会显得不洁净，而她这两片樱唇却润泽发亮。	C	C
27		少し中高の円顔はまあ平凡な輪郭だが、白い陶器に薄紅を刷いたような皮膚で、首のつけ根もまだ肉づいていない*から*、美人というよりも、清潔だった。	386		颧骨稍耸的圆脸，轮廓固然平常，但是白里透红的皮肤，宛如白瓷上了浅红。头颈不粗，与其说她艳丽，还不如说她长得洁净。	C	C
28		しかし宿屋中に響き渡るにちがいない金切声だった*から*、当惑して立ち上ると、女は障子紙に指をつこんで杖をつかみ、そのまま島村の体へぐらりと倒れた。	386		但是，声音那么尖，怕会惊醒整个旅馆，◆所以◆困惑地站了起来，姑娘手指戳破纸门，抓住门上的木框，一下子扑倒在岛村怀里，	A	A-36
28		少しでも腕をゆるめると、女はぐたりとした。女の髪が彼の頬で押しつぶれるほどに首をかかえている*ので*、手は懐に入っていた。	387		稍一松手，她便软瘫在那里。岛村搂着她的脖子，脸颊差点压坏她的云鬓。手伸进她的前胸。	C	C
32	「まだ人の顔は見えませんがね。今朝は雨だ*から*、誰も田へ出ないから。」		389	“连个人影都没有。今早下雨，谁都不会下田”		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
32		女はむっとしてうなだれると、襟をすかしている*から*、背なかの赤くなっているのまで見え、なまなましく濡れた裸を剥きだしたようであった。	389		她恼怒地垂下头去，后衣领敞开了来。可以看到泛红的脊背，好像娇艳温润的身子也整个袒露了出来。或许是衬着发色，使人格外有这种感觉。	C	C
33	「ええ、古い日記を見るのは楽しみですわ。なんでも隠さずその通りに書いてある*から*、ひとりで読んでいても恥ずかしいわ。」		390	“看看从前的日记，不失为一种乐趣。什么也不隐瞒，照实写下来，有时看了连自己都会脸红。”		C	C
35		しかし、そういう都会的なものへのあこがれも、今はもう素直なあきらめにつつまれた無心な夢のようであった*から*、都の落人じみた高慢な不平よりも、単純な徒勞の感が強かった。	392		然而，她对都会的向往之情，如今也已心如死灰，成为一种天真的幻梦。她这种单纯的徒勞之感，比起都市里落魄者的傲岸不平，来得更为强烈。	C	C
36		いずれにしろ、島村は彼女を見直したことはなる*ので*、相手が芸者というものになった今は反って言い出しにくかった。	392		总之，岛村对她有了新的认识。 ◆但◆在她当了艺妓的今天，却反而难以启齿了。	C	C
36		足が立たない*ので*、体をごろんごろん転がして、	392		她脚站不稳，倒在席子上滚来滚去。	C	C
38		足の下で畳までが冷えて来る*ので*、一人で湯に行こうとすると、…	393		就连脚下的席子也砭人肌骨。他只想自己去洗澡。	C	C
38		安心して高笑いがこみ上げて来る*ので*、湯口に口をあてて荒っぽく嗽をした。	394		感到宾至如归，直想放声大笑， ◆便◆把嘴对着龙头，使劲漱口。	B	B-2
43		島村は女のこういう鋭さを好まなかった。けれども女をこんな風に鋭くするわけは、島村にも駒子にもないはずだと思われる*ので*、それでは駒子の性格の現われかとも見られたが、…	397		岛村不喜欢她这种泼辣劲儿。但是，她之所以这么激烈，无论对岛村和驹子本人来说，都是没来由的。或许可看成是她的性格的流露。	C	C
44		頭の上は屋根裏がまる出しで、窓の方へ底まって来ているものだ*から*、黒い寂しさがかぶさったようであった。	398		屋顶上没有顶棚，向窗户那头倾斜下去，仿佛笼罩一层幽黯寂寞的气氛。	C	C
44		壁にも丹念に半紙が貼ってある*ので*、古い紙箱に入った心地だが、…	398		墙壁也整整齐齐糊着毛边纸。 ◆使◆人有种置身于纸盒的感觉。	B	B-5
45		息子は小さい時から機械が好きで、せつかく時計屋に入っていた*から*、港町に残して置いたところ、間もなく東京に出て、夜学に通っていたらしい。	399		少爷从小喜欢摆弄机器，进钟表店学手艺，一个人留在镇上。不久又去了东京，好像是上夜校读书。	C	C
46		山袴の股は膝の少し上で割れている*から*、ゆっくり膨らんで見え、…	399		雪裤腿在膝盖上方开了叉，鼓鼓囊囊的。	C	C
46		派手な帯が半ば山袴の上に出ている*ので*、山袴の薄色と黒とのあらい木綿縮はあざやかに引き立ち、めりんすの長い袂も同じわけで艶めかしかった。	399		华丽的腰带从雪裤上露出一半，把雪裤上黄黑相间的粗条纹，衬托得格外鲜明。同样，毛料和服的长袖，也显得十分艳丽。	C	C
52		…やがて坐り直してクリムで白粉を落すと、余りに真赤な顔が剥き出しになった*ので*、駒子も自分ながら楽しげに笑い続けた。	403		一会儿，又坐了起来，用雪花膏擦掉脂粉，露出绯红的脸颊。驹子自己也乐不可支地笑个不停。	C	C
55	「心にもないこと。東京の人は嘘つきだ*から*嫌い。」		406	“言不由衷。东京人就会说谎，讨厌。”		C	C
60		細く高い鼻は少し寂しいはずだけれども、頬が生き生きと上気している*ので*、私はここにいますという囁きのように見える。	410		细巧挺直的鼻子虽然稍嫌单薄，脸颊却鲜艳红嫩，仿佛在悄声低语：我在这儿呢。	C	C
62	「…私子供好きだから、よく分るんだわ。…」		411	“…我喜欢小孩子，◆所以◆她跟我熟。…”		A	A-36
62		島村も火燧から振り向いてみると、スロオプは雪が斑な*ので*、五六人の黒いスキー服がのずっと裾の方の畑の中で…	411		岛村坐在暖窝里，回头望去，山坡上的积雪斑驳不均，五六个穿黑衣滑雪装的人，一直在山下的田里滑来滑去。	C	C
66		またたび実の漬物やなめこの缶詰など、時間つぶしに土産物を買っても、まだ二十分も余っている*ので*、駅前の小高い広場を歩きながら、四方雪の山狭い土地だなあと眺めていると、	414		为了消磨时间，去买了些咸菜和鲜菇罐头等土特产，结果还有二十多分钟。◆于是◆，在地势稍高的站前广场上一面溜达，一面打量周围的景色，心想，这儿可真是雪山环抱，地带狭窄。	A	A-38
67	「お客さまを送ってるんだ*から*、私帰れないわ。」		415	“我在送客，不能回去。”		C	C
68	「いまね、宿へ電話をかけたの、駅だつて言う*から*、飛んで来た。…」		415	“方才打电话到旅馆，说你在车站，我◆就◆赶来了…”		B	B-1
70		それは冷たい薄情とも、余りに熱い愛情とも聞える*ので*、島村は迷っている、…	416		这话听来，既象冷酷无情，又像充满热烈的爱。岛村简直迷惑不解了。	C	C
72		彼は聞くのがつらかったほどだ*から*忘れずにいるものだったが、…	418		岛村听着感到心酸难过，始终不能忘怀。	C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
72		蛾が卵を産みつける季節だ*から*、洋服を衣桁や壁にかけて出せばなしにしておかぬようにと、東京の家を出がけに細君に言った。	418		在东京临动身时，妻子嘱咐他，现在正是飞蛾产卵的季节，不要把西服往衣架或墙壁上一挂就不管了。	C	C
75	「こんなもの、お一ついかがです。祝いものでございます*から*、お慰みに一口召上ってみたら。」		420	“这馒头，您来一个怎么样？是人家送的喜馒头，尝尝看。”		C	C
76	「心にもないこと。東京の人は嘘つきだ*から*嫌い。」		421	“言不由衷。东京人最会撒谎，讨厌。”		C	C
77		ちょうどその頃は雪が一番深い時であろう*から*、島村は鳥追いの祭を見に来ると約束しておいたのだった。	422		那时积雪最深，岛村曾同驹子相约，前来观看驱鸟节。	C	C
78	「・・・売れることも一番で六百本を欠かすことはない*から*、うちでも大事にされてただけれど。」		423	“・・・生意上也数她走红，从少于六百支香的，家里拿她当宝贝呢。”		C	C
81	「ええ、こわいくらい。自動車の通うのが、例年より一月も遅れて、五月だったわ。スキイ場に売店だあるでしょう、あの二階を雪崩が突き抜けて、下にいた人はそんなことをしなくて、変な音がするから、台所で鼠が騒いだんだらうと行ってみてなんともない*から*、二階へあがると雪だらけじゃないの。・・・」		425	“嗯，简直吓人。汽车也比往年迟了一个月，到今年五月才通车。滑雪场上不是有个小卖店么？雪崩把二楼屋顶给压塌了，楼下的人还不知道，听风声音不对头，以为是厨房里的老鼠在作怪。去厨房看了看，没什么事，上楼一看，到处是雪。”		C	C
81	「ええ、こわいくらい。自動車の通うのが、例年より一月も遅れて、五月だったわ。スキイ場に売店だあるでしょう、あの二階を雪崩が突き抜けて、下にいた人はそんなことをしなくて、変な音がする*から*、台所で鼠が騒いだんだらうと行ってみてなんともないから、二階へあがると雪だらけじゃないの。・・・」		425	“嗯，简直吓人。汽车也比往年迟了一个月，到今年五月才通车。滑雪场上不是有个小卖店么？雪崩把二楼屋顶给压塌了，楼下的人还不知道，听风声音不对头，以为是厨房里的老鼠在作怪。去厨房看了看，没什么事，上楼一看，到处是雪。”		C	C
83	「メエトルだ*から*、電気を無駄づかいしちゃ悪いわ。」		426	“◆因为◆装了电表，不好浪费人家的电。”		A	A-1
84	「・・・うちに小さい子供が四人ある*から*散らかって大変なのよ。・・・」		426	“家里有四个小孩，简直乱成一团……”		C	C
85	「ええ。お座敷でお客さんのくれるのを、そっと袂へ入れる*から*、帰ると何本も出て来ることがあるわ。」		427	“可不，陪酒的时候，常把客人送的香烟偷偷拢进袖子里，回去一抖落，有时能有好几支呢。”		C	C
88	「・・・年期だ*から*、主人に損をかけなければいいのよ。・・・」		429	“・・・◆因为◆我们是算年限的，只要老板不吃亏就行。・・・”		A	A-1
88		年がちがう*ので*、たまにしか来ないと言う。	429		◆因为◆年纪相差挺大，他偶尔才到这里来一趟。	A	A-1
88		一座敷で一本が自分の貰いになる*ので*、主人には損だが、どんどん廻るのだと言った。	430		每一次饭局，自己可拿一支香，老板虽然吃些亏，但水涨船高，赚的还是不少。	C	C
91		自分の足跡も残っている山を、こうして眺めていると、今は秋の登山の季節である*から*、山に心が誘われて行くのだった。	432		如今又是秋天登山时节，望着自己履痕处处的山陵，对群山不禁心向往之。	C	C
95	「・・・眠れなかった*から*、髪を洗おうと思ったの。・・・」		434	“・・・◆既然◆没睡好，想洗洗头发。・・・”		A	A-21
96	「・・・土曜日だ*から*、とてもいそがしいのよ。遊びに来られないわ。」		435	“今天是星期六，特别忙。不能来玩了。”		C	C
96		彼女が掻き登ったという熊笹は通れそうもない*ので*、畑沿いに水音の方へ下りて行くと、・・・	435		她方才爬上来时穿过的那片山白竹，看样子过不去。◆便◆顺着田边，往有水声的地方下去。	B	B-2
97		駒子はいつも行男の話を選けたがる。いいはずけではなかったにしても、彼の療養費を稼ぐために、ここで芸者に出たというのだから*、	436		驹子一向避免提起行男。虽说不是未婚夫，可是为了挣钱给他治病，才沦落风尘，当了艺妓。◆所以◆在她，是“正正经经的事”，却是错不了的。	A	A-36
97		「真面目なこと」だったにちがいない。					
97		まして、駒子がちょうど島村を駅へ送っていた時に、病人の様子が変わったと、葉子が迎えに来たにかかわらず、駒子は断じて帰らなかったために、死目にも会えなかったらしいということもあった*ので*、尚更島村はその行男という男が心に残っていた。	436		何况就在驹子送岛村去车站时，叶子来接她，说病人情况不妙，但她高低不肯回去。结果似乎临终也未能见上一面。这就◆使◆岛村心里更加忘不了那个叫行男的人。	B	B-5
98	「私は一度も参ったことがない*から*、こたわるのよ。・・・」		436	“我从来没有去过，◆所以◆，不免感到别扭。・・・”		A	A-36
98	「どうして？生きた相手だと、思うようにはっきりも出来ない*から*、せめて死んだ人にははっきりしとくのよ。」		436	“为什么？他活着的时候，你把态度说清楚，至少死后该有个明白交代啊。”		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
98	「分らないわ、東京の人は複雑で。あたりが騒々しい*から*、気が散るのね。」		436	“我真弄不懂，东京人太复杂了。是不是周围乱糟糟的，对什么都不以为意了呢？”		C	C
98	「・・・今はお師匠さんもいっしょに埋まってるんです*から*、お師匠にはすまないと思うけれど、・・・」		436	“・・・现在师傅也葬在一起，我觉得挺对不起师傅的・・・”		C	C
98		栗をぶつつけられても、腹を立てる風がない*ので*、駒子は束の間訝しうであったが、ふいと折れ崩れるように縋って来て、・・・	436		见岛村挨了栗子竟没生气，驹子一下子怔住了，顿时软了下来，攀住岛村说：	C	C
99		思いがけなく葉子に会った*ので*、二人は汽車の来るのも気がつかなかったほどだったが、そのようななかにも、貨物列車が吹き払って行ってしまった。	437		两人无意中遇见叶子，竟没注意开来的火车，而货车一过，方才尴尬的场面，也给一带而去，烟消云散了。	C	C
100	「弟が乗っていた*から*、駅へ行ってみようかしら。」		437	“弟弟在车上，要不要去车站看看呢？”		C	C
101	「ああ厭だ。もう髪を結うの止めた。あんたがよけいなことを言う*から*、あの人の墓参りを邪魔しちゃった。」		439	“唉，烦死了。不去梳头发了。全怪你多事，扰得她上不成坟。”		C	C
102		駒子はうんと仰反って転がるものだ*から*、島村は重苦しくなって起き上ろうとしたが、・・・	439		驹子一骨碌往后一仰，压得岛村透不过气来。・・・	C	C
103	「これで来た*から*、帰る。髪を洗うのよ。」		439	“我来过了，这◆就◆回去。我还要洗头去呢。”		B	B-1
104	「お友達に悪い*から*行くわね。帰りはもう寄らないわ。」		441	“不好让人家久等，我该走啦。回家的时候，我就不过来了。”		C	C
106		溪流の奥の紅葉を見に行くので、彼は駒子の家の前を通ったことがあったが、・・・	442		有一次，岛村去溪谷深处看红叶，经过驹子家门前。	C	C
107		その時彼女は車の音を聞きつけて、今は島村にちがいないと表へ飛び出てみたのに、彼はうしろを振り返りもしなかったのは薄情者だと言ったほどだ*から*、彼女は宿へ呼ばれさえすれば、島村の部屋へ寄りかかるとはなかった。	442		她听见车声，断定准是岛村，便跑了出来。而他竟然都没有回，事后她曾责备岛村，是个薄情郎。驹子只要应召来旅馆，是不会不去岛村的房间的。	C	C
107	「つらいわ。三十人の相手に三人しかないの。それが一番年寄と一番若い子だ*から*、私がつらいわ。」		443	“真受不了。对方有三十个人，我们才三个人。而且，老的老，小的小，◆就◆苦了我・・・”		B	B-1
108	「土地が狭い*から*困るだろう。」		443	“小地方◆就是◆多事。”		B	B-16
111		瀬戸物の音が遠く聞えたりする*ので*、駒子も客に連れられて別の宿の二次会へ廻ったのかと思っていると、葉子がまた駒子の結び文を持って来た。	446		远远传来收拾碗盏的声音。以为驹子被客人带到别的旅馆，去陪第二次酒时，不料叶子又拿着驹子打了结的字条来了。	C	C
113	「うちの人って、鉄道へ出ている第一人です*から*、私がかきめちゃっていいんです。」		447	“我家里，只有一个在铁路上做事的弟弟。我自己做主就行了。”		C	C
113	「駒ちゃんはいいんですけれども、可哀想なんです*から*、よくしてあげて下さい。」		447	“驹姐姐人很好，就是太可怜了，请你好好待她吧。”		C	C
113		こともなげに、しかし真剣な声で言う*ので*、島村は驚いた。	447		好像随便说说，但声音却透着真挚，岛村感到惊讶。	C	C
114	「駒ちゃんですか。駒ちゃんは憎い*から*言わないんです。」		447	“你是说驹姐姐吗？她可恨，我◆才◆不告诉她呢。”		B	B-6
118	「・・・ここにお座敷があった*から*いいよなもの、お友達が帰りにお湯へでも誘ってくれて、私がかきめなかったら、あんまりだわ。」		450	“这里有饭局倒还好说。等会她们回家约我去洗澡，我若不在，就太说不过去了。”		C	C
121	「私一人だ*から*広いことは広いよ。」		452	“我一个人住，大是够大的了。”		C	C
121		島村は寝息の温みに押し返されるように、思わず表へ出ようとしたけれども、駒子がうしろの戸をがたびししめて、足音の遠慮もなく板の間を踏んで行く*ので*、島村も子供枕もを忍ぶように通り抜けると、怪しい快感で胸が顫えた。	452		房里一股热烘烘的鼻息，逼得岛村不由得想退出门去，可是驹子已把后门拍达一声关上了，也不顾脚下出声，踩着木板地过来，岛村蹑手蹑脚走过小孩子的枕头边。一种奇异的快感，使他胸中发颤。	C	C
121	「お客さんのくれるのを袂へ入れたり帯に挟んだりして帰る*から*、こんなに皺になってるけれど、汚くはないの。・・・」		453	“客人给了，我就兜在袖子里或掖在腰带里带回来。虽然皱成这样，却一点不脏。”		C	C
122	「あら、櫛寸がないわ。自分が煙草を止めた*から*、いらぬのよ。」		453	“哎呀，没有火柴。戒烟了，◆便◆用不着了。”		B	B-2
122		話の継穂がない*ので*、島村はそそくさ立上がった。	453		。。。一时找不出话来，岛村◆便◆匆匆忙忙站了起来。	B	B-2
124	「・・・つらい*から*帰って頂戴。・・・」		454	“・・・我心里难过，你还是回去吧。・・・”		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
126		廊下に隠れて立ったまま、部屋へ入って来そうもない*ので*、島村が手拭を持って出て行くと、駒子は目を合わせるのを避けて、少しうつ向きながら先に立った。	456		躲在走廊上站着不肯进来。岛村◆便◆拿了毛巾出去。驹子怕碰见他的目光，略低着头走在前面。	B	B-2
128		娘達が半年の丹精で織り上げたのもこの初市のためだ*から*、遠近の村里の男女が寄り集まって来て、見世物や物売の店も並び、町の祭のように賑わったという。	457		姑娘们辛苦半年，精心织的麻约，也为了赶这个一年中的头一个集市。远村近邻的男男女女都云集到此，耍把戏的，卖东西的，摊头鳞次栉比，就跟城里庙会一般热闹。	C	C
128		踊の方の縁故から能衣裳の古物などを扱う店も知っている*ので*、筋のいい縮が出たらいつでも見せてほしいと頼んであるほど、この縮みを好んで、一重の襦袢にもした。	457		因舞蹈方面的关系，他认识经营古典戏装的旧货店，甚至托他们，但凡有什么货色好的，便留给他看看。他喜欢这种麻约，有时也做成贴身的单衣。	C	C
129		旧の一月から二月にかけて晒す*ので*、田や畑を埋めつくした雪の上を晒場にするのもあるという。	457		白约布是直接铺在雪地上晾，从旧历正月晾倒到二月。◆所以◆，据说有时就把盖着积雪的田地当成晒场。	A	A-36
129		しかし島村は縮を着る真夏にも縮を織る真冬にも、この温泉場に来たことがない*ので*、駒子に縮の話をしてみる折はなかった。	458		但是，无论穿麻约的盛夏，抑或织麻约的寒冬，岛村都没有来过这个温泉村。◆所以◆也就无从和驹子提起麻约的事。	A	A-36
129		もっとも東京の古着屋が扱ってくれる*ので*、普通の晒し方が今に伝わっているかどうか、島村は知らない。	458		不过，晾晒之类都由东京的估衣店代办，至于古代晾法，究竟有没有传下来，岛村便不得而知了。	C	C
131		現在機業地に発展している大きい町が見たいというのではない*ので*、島村はむしろ寂しそうな駅に下りた。	460		他不想去看已经发展成织工业的大镇，宁愿在一个冷清的小站下车。	C	C
132		同じ雪国のうちでも駒子のいる温泉村などは軒が続いていない*から*、島村はこの町で初めて雁木を見るわけだった。	460		虽然同是雪国，但驹子所在的温泉村，屋檐并不相连。◆所以◆岛村到了这个镇上，头一次见到“雁木”。	A	A-36
132		なにも見るものがない*ので*、島村はまた汽車に乗って、もう一つの町に下りてみた。	461		看无可看了，岛村◆便◆又乘上火车，到了另一个村镇。	B	B-2
138		石段の下では火事が人家にかくれて燐の頭しか見えないところへ、擦半鐘が鳴る*ので*、なお不安が増して走った。	465		石阶下面，因为有房屋遮挡，只看见火苗。这时，火警又震天价响，◆使◆人愈发惶惶不安地奔跑起来。	B	B-5
140	「私が笑われる*から*、帰って頂戴。」		466	“人家要笑我的，你回去吧。”		C	C
141		小太りの島村は駒子の姿を見ながら走っている*ので*、なお早く苦しくなった。	467		岛村体格略胖，一面看着驹子的背影一面跑，很快◆便◆感到吃力了。	B	B-2
143		天の河はその山波の線で切れるところに裾をひらき、また逆にそこから花やかな大ききで天へひろがってゆくようだった*から*、山はなお暗く沈んでいた。	468		银河在峰峦起伏的尽头，展开她的裙裾，反过来，似乎又向天空灿穿四射。山容益发显得黑沉沉的。	C	C
145		板葺板壁に板の床だけががらんどうだ*から*、屋内にはそう煙も巻いていないし、…	469		除了木板顶、板墙和地板之外，茧仓里空空的。◆所以◆里面的烟并不怎么大。	A	A-36
146		その二階から落ちた*ので*、地上までほんの瞬間のはずだが落ちる姿をはっきり眼で追えたほどの時間があつたかのように見えた。	470		从楼上掉到地上，照理只是转瞬之间的事，但时间长得好像能让人看清掉下来的姿势。	C	C